三區環鉄路決戰戰利
反帝戰線全國委員

もくじ

第一章　日帝ー公国の開港攻撃ー三里塚闘争破壊は、侵略反革命戦争に、ひた走る死者をねらいに攻撃である　(3)

第二章　三里塚斗争は、農民の革命的民主主義斗争の最高峰であり、戦后農民運動の革命的出発点を画さんとするものである。　(7)

第三章　〈武装蜂起ーずロ独樹立〉の大道の下、三里塚鉄塔決戦勝利に進撃せよ　(13)

共産同党内党永斗争の勝利的地平をふまえ、ずロの武装蜂起を組織する中央集権非合法党建設の下、現斗再建斗争に勝利し、鉄塔再決戦勝利！三里塚斗争勝利へ邁進せよ　(18)

資料　(23)

帝国主義の侵略反革命、社会帝国主義の武装反革命を粉砕し、世界革命戦争ー世界ずロ独を組織する世界単一党を国際階級斗争の最前線に組織せよ！

民族解放ー社会主義勢力の前進と結合し、日帝の侵略反革命を内戦へ転化せよ！

革命的労働者人民は共産同全国委に結集し、ずロの武装蜂起ーずロ独を組織する中央集権非合法党を戦取せよ

《はじめに》

全国の革命的労働者人民・農民諸君！

三里塚鉄塔決戦に総力決起し、三里塚闘争勝利に向けた、新たな宣戦布告を宣言せよ！

閣議決定以降10年、9・16東峰十字路以降5年、三里塚闘争は、今や不屈の農民魂、革命的労働者人民の推進に支えられ、日本革命運動の中に新たな地平を築きあげんとしている。一機の飛行機だに飛ばさせず、敢然と開港を阻み、開港攻撃の破綻を満天下にさらけだしてそびえ立つ鉄塔は、最早いかなる日帝－国家権力の攻撃に対しても、ひるむことのない三里塚闘争の総意を示すものの如く、日帝－山田をにらみつけている。そして、風雲急を告げる開港攻撃、吹きあれる日帝の農業破壊－棄民化攻撃に抗し、今、三里塚農民は秋の反撃期を担い、ますます、斗いの決意は鮮明である。

闘う諸君！日帝の朝鮮侵略反革命戦争と総対決し、鉄塔決戦勝利を我がものにせよ！

我が反帝戦線（全国委）は、三里塚現地闘争5年の成果をかけ、一切の脱落分子、脱落分子たる加納、永井一派との勝利的区分※の上に、この決戦中の決戦に向けて、我々の戦斗宣言を明らかにするものである。

※…分派斗争の

第Ⅲ章　日帝－山田の開港攻撃

―三里塚斗争破壊は侵略反革命戦争にむけた死活をかけた攻撃である！

今、日帝－国家権力は、その命運をかけて、三里塚斗争を破壊し、開港攻撃を急ピッチで推し進めんとしている。難行する燃料輸送、他に対する住民斗争に直面しつつも、何がなんでもフライト、チェックインをデッチあげ、一挙的にこれらの周辺住民、そして、全国基地住民斗争を総破壊し尽さんと狙いをつけている。本年六月、虚実に満ちた六十一項目にわたる「見返り条件」によって、ともかくもデッチあげた補償、朝来、菱田三町との「合意」に明らかなように、周辺住民、労組の反革命的買収に象徴しつつ、一方で、この間の東峰公判斗争、第二次代執行攻撃、設置上公判斗争における横田裁判長の反動訴訟指揮－単独、ストロー化整理、そして現地における政府警察－機動隊の暴力的横暴、右翼テロルに見られる官憲的警察的独裁支配を駆使した暴虐な攻撃って、その具体的姿に他ならない。

これらの攻撃は、単に、「開港策動破綻の危機の焦つまり」から出てきたのではない。事の本質は、徹頭徹尾、今日の日帝の南朝鮮新植民地主義支配－侵略反革命戦争遂行と、これに向けた国内統治形態の転換との対決としてある。これと結合した日帝の農民支配との対決を、今、三里塚斗争は、革命的労働者人民とまさにになって、闘ちとるものとしてある。

確立に、公団は、今やそのボロボロの「空港政策」をひたなくし、もはや「年内行事」となった「年内開港」宣言は、そのたびに破産をさらけ出し、しまいには、政府内部なら「羽田拡張論」や、空港審議会、青年会議所ならも、「ここのきき用者を認めるわけにはいかない」の発言も飛びだし、まさに絶望的強行に訴える以外に道はない危機にたたされている。にもかかわらず、日帝一国家権力は、「鉄塔な唯一の障害」と、傲然と言い放つにも明らかな様に、唯一、全国基地住民斗争、農民斗争の最高峰にそびえたつ、三里塚斗争を破壊することなくして、その野望たる侵略反革命戦争・遂行体制を完成することはできないのである。

ヤルタ・ポツダム体制の崩壊を通して斗われた「戦争と革命の時代」は、帝国主義と、その矛盾をなけれた侵略反革命戦争へとなりだしている。七四年四・三〇ベトナム完全解放以降、持続する民族解放・社会主義勢力の前進は、ASEAN諸国の動揺をさえもたらし、被抑圧民族の斗いをふるいたたせ、帝国主義の世界支配に決定的打撃を与え続けている。それは、まず一に、帝国主義世界支配を根底なら揺るがしたことにあり、また二に、一旦ヤルタ・ポツダム体制の下に封殺された国際共産主義運動の歪曲・一社帝潮流の育成を打ち破り、「全世界的規模での資本主義なり社会主義への現実的移行レな、全世界の労働者人民、被抑圧民族の課題として発展してくることへの恐怖を、極めて具体的なものとした。

既に七〇年代前半、インドシナでの敗北を見てし旦米帝は、韓国朴政権を最後の生命線とした、決死の侵略反革命体制の再編にのり出したのであり、昨年来の一連の国際会議での「自由主義国家の存亡を賭する危機」の絶叫、又、「前進戦略」への旦旬戦争宣言」という反革命宣言にも明らかなごとく、韓国を前進基地とし、沖縄をベトナムシンガポイントとするごとき侵略反革命体制の確立を帝国主義世界支配の命綱として推し進めようとしているのである。

本年七・八安保協開催―防衛協力委設置―そして、このような米日帝のマジマ侵略反革命戦争遂行に向けた女回軍事行動―女回作戦司令体制の本格的具体化である。「板門店事件」に見られる米帝の許すまじき戦争挑発行動と共に、沖縄・横田・岩国基地ならびにジェット戦斗機及び空母ミッドウェーなど出港した事態こそ、これらが一点、朝鮮侵略反革命戦争に向けて、死の行軍を開始したことを、はっきりと物語っている。

このような中で、米帝を中軸としした「次期対潜哨戒機」の介担配備に基き、暗躍した帝国主義者共の「ロッキード事件」に端を発した政府危機の中で、「防衛関係な決定し、警察・検察・裁判所・官僚組織な健全なら、この危機は乗り切れる」と、日経連・桜田氏が言い放ったように、日帝一国家権力は、増々強権的に、官僚的警察的組織支配を基に、この侵略反革命戦争へとひた走ることを宣言した。それは今、革命的労働者、農民の斗いを破壊しつくし、天皇制イデオロギー攻撃を動員し、

その反革命統合を至上の任務とする翼賛の声を踏みにじっているのである。

それは、三里塚斗争に対し、集中的に打ちおろされている。三里塚斗争を物質的基盤とした全国農民斗争、基地住民斗争の前線的結合の開始と、その革命的発展な、この日帝の侵略反革命戦争の前に立ちはだかり、そして、これなわれわれと革命的ロレタリア人民の手によって、武装蜂起へと至るうねりへと成長していくことに対する米軍有の恐怖をこめて、この攻撃は存在している。

それ故に、既に絶望的な開港強動の破綻にもなわれらず、日帝一国家権力は、更なる動用と人員を投入し、総力をなけて、開港攻撃に打って出ざるを得ないのである。七六年四月二五日、公団大塚は、「年内開港断念」を表明した。理由は、①燃料輸送に関して、農民地方の地元との調整な四月中につなず、その見通しさえ立たない、②農島の石油タンクへ農島石油の建設な着工なら四年半でたて月なる、③航空機去の仮処分の目途がたたない、である。

以降、「燃料輸送に対する二九項目の条件」が、神、栖、潮来、鹿島町から県当局に提出されるや、政府ー公団、マスコミ一体となって「開港へ歩み出す」成る「は鉄塔のみ」とキャンペーンしながら、その二週間もたたないうちに、千葉ー成田間の本格パイプライン工事計画の提出期限を更に一年間延長（二回目）するあり様である。公団はここでも開港策動の破綻を暴露するのである。それは燃料問題が何の目算もたたないことを物語っている。このパイプラインは、千葉市内において、千葉港と新空港高速道の、起点と終点しか決定し得ていない代物であり、①成田市暫定パイプライン工事の凝固剤問題で、本格パイプラインまで手が回らない。②ルート決定の資料収集に手間どる。③候補にあげたルートの技術的検討が困難、等を公団に言わせしめ、既に、その破算すら明らかにしているのである。

更には、「空港」から東京までの交通（アクセス）問題である。当初から、反対同盟が闘いの中で暴露してきたように、成田新幹線は「視界ゼロ」であり、鹿島東自動車道空港線も、故大木よねばあの畑に寸断され使用不能。そして、唯一、持ち出した京成電鉄と国鉄成田線ならべて運行も、単なる権力の願望であり、実現困難等、不可能以外の何ものでもないのである。これには、青年会議所もゴネ出すあり様であり、権力の確信は、唯々、強行に向けて一切を破壊し尽すことであるのは、目に見えている。

そして、騒音、アプローチエリア設計ミスで、空域保護め、数えあげればきりのない山積みした難題こそ、「開港」の具体的姿に他ならない。

同志諸君！権力ー公団の脆性は見えすいている。我々は、ひるむことなくこれを打ち砕くだけである。

第2章

三里塚闘争は、農民の革命的民主主義斗争の最高峰であり、戦後農民運動の革命的出発点を画さんとするものである。

同志諸君！革命的プロレタリアと人民、農民の諸君！これらの攻撃は、十有余年に渡る三里塚闘争が闘いとってきた成果の一切の自然成長性をふるいにかけ、この"革命と戦争の時代"を勝利的に切り拓き得る意識された階級的運動として発展させられるか否か、その勝敗はかかっている。迫りくる鉄塔決戦は、権力の開港攻撃に対する「受動的」闘争ではなく、既に、三里塚闘争十有余年の中で萌芽的に形成された戦後農民運動の革命的前進の高らかな戦闘宣言として闘いとられなければならない。同志諸君！流され続けてきた血は、何ものをも恐れずこの道をさし示し、もって、この血に報いなければならない。

六〇年代後半、三里塚闘争は、公団を使っての日帝ー国家権力の悪ラツ非道な強権的土地取りあげと対決し、農民魂の怒りを爆発させた。日帝の農業破壊ー棄民化攻撃の下で、関東ローム層の開拓を行ない、改良されるべきほどの改良には至らぬまでも、農機具の購入を含め肥沃な土壌と農業生産をその腕でつくりだしてきた三里塚、芝山農民の、その生存をかけた闘いとして、日帝ー国家権力との非和解的対峙を形成した。

以降十年にわたる闘いの歴史は、日帝ー国家権力の開港攻撃の二つの性格との対決の中で、戦後、米日帝によりうちおろされた農民支配を打ち砕く出発点を切り拓かんとしているのであり、この帝国主義の攻撃に敗北し骨抜きにされていった戦後農民運動の転換点を画さんとする農民の革命的民主主義闘争の最高峰の位置を闘いとっていったのである。

朝鮮攻撃の二つの性格とは、第一に、日帝の侵略反革命ー南朝鮮新植民地主義支配に伴う軍事基地網の再編・強化であり、第二に、この農民への強制的土地収奪を推し進めた日帝の農業破壊ー棄民化攻撃であり、三里塚斗争は、小土地所有を軸にした農民の民主々義斗争として出発しながらも、この二つと真向うから対決することによって、現在、全国農民斗争、基地住民斗争の中に、不抜の位置を築きあげるに至ったのである。

おりしも、この六〇年代後半から七〇年代初頭は、国際階級斗争の激動の時代であり、民族解放ー社会主義勢力の、帝国主義の侵略反革命ー他民族抑圧との対決は、中ソ論争来の国際共産主義運動の大分裂を最悪の地平として、不屈の進撃を続け、ヤルタ・ジュネーブ体制の最終的崩壊ー「戦争の時代」の煮つまりを切り拓いた。この時代に、社民潮流ー日本共産党の社会排外主義への転落と全面的に対決し、「帝国主義の侵略反革命を内戦へ！」を実践スローガンにのぼせ、安保粉砕ー日帝打倒斗争を担った革命的左翼と結合し、この三里塚斗争の地平は斗いとられ、日帝の農業政策の基本路線たる侵略反革命ー南朝鮮新植民地主義支配と結合した農業破壊ー棄民化攻撃を、一体のものとして斗い抜く革命的出発点を築きあげたのである。

では、それは戦後農民支配との、いかなる対決を切り拓いたのか。

戦後農民支配は、「農地改革」ー「食管法」を基本的骨格として、その出発点を作りあげた。この一連の攻撃は、戦後帝国主義の世界支配体制たるヤルタ・ジュネーブ体制確立に向けた、帝国主義ーブルジョワ階級の不可避の攻撃であった。

戦前、天皇制絶対主義権力がおしたてた日帝の二重の敗北ー帝国主義間戦争と民族解放斗争へのーーの間隙をぬった戦後の革命的高揚期に対し、米日帝は、帝国主義の延命と専制支配の貫徹のための、ブルジョワ的再編を強行し、その根絶しの攻撃を打ちおろした。

戦後動乱期における膨大な失業者群、激化する「飯米斗争」、小作争議に挑戦するかの如く、米日帝による「農地改革」は、形制再編を含めた農民支配の末端までの貫徹を唯一の目的として、零細自営農、開拓農民を大幅に創出し、天皇制絶対主義権力の物質的基盤として存在せしめられてきた半封建的地主ー小作関係を、むきだしのブルジョワ専制支配の下に統合した。

この上に引き続く「食管法」こそ、作付規制・販売価格・数量の規制等の、農業生産の全般を統制し、帝国主義の新植民地主義支配、強盗的抗争の下に、農業政策を確定し、農民収奪を公然と推し進め、強権的な農民分断を強行する、帝国主義者の武器であった。

このような攻撃は、同時に、権力自らが、その同盟者を斗い内部に育成し、斗いを腐らせ、破壊するための、手を変え、品を変えた攻撃をもあわせもつものとして、進められたのである。

戦後当初、「反天皇制絶対主義権力ー反封建制」をかかげた日本共産党は、この米日帝の戦後支配体制確立の攻撃を見抜き得ず、「農地改革の徹底化ー農地完全解放」を方針化し、当時組織されていた小作・雇用農・貧農、及び帰還者等の土地斗争の、ブルジョワ的再編に抗し得ず、それらを敗退せしめていった。

この時期、支配の転換をめぐり、農民運動の実践的方向をめぐり、論争な開始された。それは、この日本共産党の反封建斗争と、甘藷価格斗争・営農資金斗争・税金斗争を展開した常東農民運動による反独占斗争との論争であった。

だが、農民運動なそれ自体、農民支配の性格を見いだせば勝利するものではない。その勝利は必ずや、革命運動との結合を不可避のものとする。これを避けて通るものは、農民運動が結局は、農民の改良主義的斗争のみに押しとどめるものである。これは、日本共産党の反封建斗争の衰退に対し、常東農民運動の、農民の革命的エネルギーを引きだした高揚を斗い取りつつも、終息せしめ

られていくのである。

このようにして、戦后革命期の衰退と共に、五〇年代初頭、社民どもによる日農の占拠と御用機関化に対し、全日農結成へと引いとられた戦后農民運動の出発点は、日本共産党によって社帝路線の下へ収約された。既に、五全協は、「米帝従属－植民地主義支配」の下での「民族解放斗争」と日本革命を規定し、五〇年代朝鮮侵略反革命戦争下における米日帝による非合法化攻撃の下に、全面的に敗北した。六全協－7回大会は、この社帝路線ならする収約であり、平和主義－議会主義を中軸にしたブルジョア専制支配へのズブズブの屈服の公然たる宣言であり、「協業化」提案に見られる日帝の農民支配への武装解除のみならず、これを「左」から支える帝国主義の良き随伴者として成長していくのである。そして、これらに対する斗争の敗北は、多くの農民活動家を離脱せしめ、農民運動の分散と崩壊が進行し、戦後農民運動は権力・排外主義者によって破壊され、掌握されるのである。

この様な農民運動の破壊とブルジョア専制支配の貫徹として出発した農民支配に、以降打ち下ろされたのは、農業破壊－棄民化攻撃であった。

農業破壊－棄民化攻撃は、「都市（工業）への農村（農業）の従属、動員」という資本主義の本質的支配のみならず、侵略反革命同盟の内に強盗的攻撃をはらみ、新植民地主義支配を生命線とする現代過渡的世界帝国主義といわけ日本帝国主義の基本路線である。日帝は、米帝の侵略反革命戦争の特需を強力なバネとしつつ、着々と重工業化段階を整備し、「高度経済成長政策」として表現し、その発展にみあった労働力の創出を推し進めた。そして、それは60年代後半から開始されたヤルタ・ジュネーブ体制の崩壊、国際階級斗争の大激動の中で、帝国主義支配を支える支柱として徹底して強化された。

60年代前半にはじまる農基法にもとずく麦作農政は、輸入農作物を軸にした儒要均衡価格を決定し、麦作（即ち、麦作を基幹として成立していた畑作農業　麦作を裏作として存在していた伝統的な水田農業）の切り捨てを公然と宣言し、戦后農業構造を根幹ならゆるがした。60年代后半には、更に「過剰在庫」「食管会計赤字」をふいなざし、70年代にはいって米作減反を打ち出した。

60－70年にかけて、「農基法農政－総合農政」として打ち出されたこれらの攻撃の意図は鮮明である。これらの攻撃は、富農、富裕中農、農協幹部を育成し、他方、圧倒的多数の農民のプロレタリア化、半プロ化（兼業農家、出稼ぎ農業）を推し進めた。いわゆる「三ちゃん農業」に見られるように、家族労働を中心とした農業活動を分解せしめながら、困窮と過剰労働を推し進め、増々農民支配を強化した。それは総農家戸数の約60％を占め米販売農家の90％、米販売量の65％を占める、土地耕作1.5ヘクタール以下の貧農、下層中農に対する行政機構、そしてその尖兵たる町村長、農協組合長による土地売却離農の促進として進められてきたのである。

現在において、90％の農民は農業経営が破産し、兼業化しており、50年代一ヘクタール規模、60年代二ヘクタール、70年代三ヘクタールへとせばめられて来た「自立経営農家」の日帝からする経営規模の設定は、最近その対象を四－五ヘクタールと宣言したことにも見られるごとく、日帝の貧農の都市への放出、中農の解体、半プロ化、富農の育成という基本路線を余すところなく示している。

「農地改革」－「食管法」の上に築かれたこの「農基法農政－総合農政」こそ、「国際分業論・残地農業論」の基調を端的に示しているごとく、侵略反革命－南朝鮮新植民地主義支配と結合した暴力的な国家権力による農業破壊－棄民化攻撃の具体的遂行に他ならない。日帝－国家権力は、一握りのブルジョア的農業経営をのこし、それを支配の尖兵としつつ、まさに「お気に召すまま」に、強権的な農民からの「土地・水・労働力」の取りあげを敢行するのである。

このような攻撃の渦中にあって、三里塚斗争はその10有余年の斗いを通して、これらとの根底的対決の地平を手中にした。

第一に、それは日本ブロレタリアん民の国際主義的政治的任務との結合を端緒的に斗いとった。社帝潮流―日共、社民による農民運動の排外主義的掌握との対決は、決して局面的な戦斗性や、ブロとの実体的結合に限定されてはならず、その出発的は、このような日帝の侵略反革命―南朝鮮新植民地主義支配との対決―国際主義的政治的任務を据えることにある。日帝の農業破壊―棄民化攻撃、そして、この頂点たる農民からの強制的土地取りあげは、この日帝の基本路線と不可分であり、三里塚斗争はこれを一体のものとして斗う出発点を切り拓いたのである。

第二に、この日帝の侵略反革命の遂行の要―官僚的警察的独裁支配との対決を通して、日帝の農民支配を貫ぬくブルジョア専制支配との全面的対決を切り拓いて来たことである。71年9・16は、その頂点をなすものであり、これらは、農業破壊―棄民化攻撃に対する身のふり方―現地・代替地における農業活動の見通しを云々する条件求、賛成求との斗争、更には、行政指導と銘打ったこれらの育成との対決を経つつ、斗いとられてきたのである。

これらを出発点とした農民運動の革命的萌芽が、社共排外主義農政活動を打ち砕き、革命的労働者人民と結合し、今日の世界的激動に、日本ブロの国際主義的政治的任務を実現すべく前進すること、これこそ日帝―国家権力の死活をかけた恐怖である。

三里塚鉄塔決戦をめぐる攻防は、我々にとって、このような戦后農民運動の新たな戦斗宣言を斗いとる物質的基盤を我々が死守し、斗いとるか否かの決戦である。もはや全国農民の噴激は頂点に達している。そして、その前進の水路は、今、この三里塚鉄塔決戦にあるのだ▷

第13章

〈武装蜂起―ブロ独樹立〉の大道の下、三里塚鉄塔決戦勝利に進撃せよ▷

同志諸君〇

第一、第二章で既に明らかとなったように、三里塚鉄塔決戦を全し民的政治課題の一環にのぼせて斗い抜かなければならない。そして一点の雲いもなく、〈武装蜂起―ブロ独〉の大道の下に、この発展を組織し、戦后農民運動のブルジョア的再編に終止符を打たなければならない。革命的労働者人民・農漁民・学生の手によって、朝鮮侵略反革命戦争にひた走る日帝―国家権力との激しい斗争として築きあげられて来た革命的萌芽の一切を防衛し抜き、明確に権力奪取をめぐる新たな斗いへと突入させなければならない。今秋期鉄塔決戦は、その一大攻防環である。

これをめぐる激しい攻防は煮つまっている。日帝―国家権力は、もはやないふりかまわぬ大弾圧に打って出ると同時に、斗いの内外に、その同盟者を送りこみ、斗いを骨抜きにせんとしている。これらの命をうけた社会排外主義・右翼日和見主義は、日帝の農民支配につけこみその任務をはたさんとしているのである。これらと分対決、これらと自己をはっきり区別すること、鉄塔決戦を迎えた緊要の課題に、我々はこれを据えなければならない。

日帝の農民支配は、昨年末の「新食料政策」「新全総中間報告」にも明らかなごとく、今、音をたてて崩れる農民の血の汗で築かれた見せかけの繁栄に、更に農民をしばりつけ、ムチ打つものとして存在している。支配者階級は、一握りのブルジョア的農業経営に従属させた「協業組合化」等にを打ち出し、家族・労働を動員したギリギリの農民の窮迫を「中核的農家の所得獲得保」と言い放ち、富農、農協幹部を使って、この見せかけの繁栄の中に、経営者根性のあだ花を咲かせようと奔走し

ている。

瀬利同盟に端を発した権力の同盟者共は、権力の吹き荒れる農業破壊－棄民化攻撃に屈服し、この農業支配に敗北し、登場した。すなわち、より経営者的にうまく農業を行ない得るなお否なにてんびんをなけ、自帝－公団の開港攻撃の尖兵になり果てたのである。そして、三里塚の革命的農民は、この数ヶ年間にわたる斗いの成果をなけて、これと対決し、鉄塔決戦に向けた隊列を、より一層強固に打ち固めた。瀬利脱落を契機として具体化した敗北主義の登場に対して、瀬利の同盟ならの除名のみならず、町議会、さらに芝山町なら追放せんとする斗いと同時に、瀬利の所有であった横堀鉄塔、公民館を同盟所有に獲得するなどの斗いを結節点としながら、敗北主義との斗いを前進させている。

我々はこの地平を、更に、社会排外主義、右翼日和見主義との斗争として前進させなければならない。

既に三里塚斗争にとって阻害物であるばかりな、敵対物である社会排外主義者共は、三里塚斗争をプルジョワ民主主義要求――あるいは、代替地、土地価格の条件問題――民主的解決、あるいは、開港にとっての適地であったな否な――へと歪曲する、権力の別動隊であり、とりわけ、日共にあっては、そのことをもって三里塚斗争の直接的破壊に奔走する反革命である。彼らの農政活動とは、プルジョワ民主主義的要求を軸にした陳情運動であり、プルジョワジーの利潤に群がり、その分け前を要求しながら、ちっぽけな改良を通じて、より一層合理的な農民支配をのぞむものに他ならない。彼らは日帝の農民支配を温床として育ち、農業改良運動を基盤とした首尾一貫した組合主義政治によって、日帝の侵略反革命－南朝鮮新植民地主義支配と結合した農業破壊－棄民化攻撃に一指も触れることなく、プルジョワ民主主義－合理的農業を追求する、帝国主義の「左」ならの補完物である。持続し、拡大する農民の戦斗的革命的民主主義斗争の発展を、このような組合主義政治の中へひきづりこみ、

日帝の侵略反革命戦争の大動員へと導くことによって、彼らはその「窓口」としての位置をあずかっているのである。彼らにとって、従って三里塚斗争は、「たなにき行きすぎた斗争」であり、権力にむかって、もっともらしく合理的な解決を要求し、そして斗いをその下に屈服させんとするのである。

「戦争の時代」の煮つまりに見あった最近のこれら社会排外主義者共の反革命的純化ぶりは、その線を補完する右翼日和見主義者達の任務を、より大きなものとしている。社会排外主義者と同一の基盤にあいなだら、斗いの内部に忍びこみ、これを内部なら腐らせんとする右翼日和見主義との対決は、鉄塔決戦勝利の道をはき清める我々の斗いにとって、極めて重要である。

当然とて、社共は戸農政府を樹立せよ！と、社共排外主義政権構想との合流を宣言した斗トロの諸君は、鉄塔決戦の煮つまりの中で、三里塚斗争に対する反動的立場をいやおうなく暴露した。百民一貫して、日帝－国家権

の開港攻撃との対決を、プルジョワ民主々義要求の拡張にしぼりつけんとしてきた彼らは、「トロ田・トロ畑」にも見られる如く、社会排外主義者と同一の、合理的農業の追求－プルジョワ農政改良派であった。それは、近互ブジワ化され、三里塚斗争の革命性は、「世界の食料問題の解決」という直接的労働としての農業生産」にあると吹聴するに至った。彼らの役割りは明らかである。このような亜和主義と単純商品生産への賛美は、激しく農民分解を開始し、プルジョワ国家権力の具体支配との斗争を積み重ねてきた革命的農民に唾を吐きかけ、農業破壊－棄民化攻撃の嵐の中にたちどまり続けることを要求するものである。プルジョワ女は、まるけって高こで、彼らにホオずりをし、そして、鉄塔攻撃食らわせるだろう。そして、鉄塔決戦に対しては、日帝の侵略反革命の野望をみごとにおかしねくし、「ロッキード疑獄」の暴露と空港過地の問題に右横左往する社民政治に堕することを要求している。

彼らは「三里塚廃港直お宣言」とは、日帝一国家権力には一指も触れない、社会の尻拭い運動という、おそるべき革命変形とは無縁の代物である。「自民党政府打倒の農村三里塚闘争もせいぜいこの程度のものであり、鉄塔決戦とは、そのための時間かせぎ役、暴露の材料に過ぎないものに他ならない。

こうした中にも、「侵略反革命戦争との対決」を唱え、「ベトナム完全勝利一周年」記念集会に参加するなど、一派は、数百個の三里塚闘争の旗立てに口をぬぐい、今更ながらに「三里塚闘争に学び」にゴキブリ的に群がった。日向一派の野望に組みするものである。戦後農民運動の最も厳しい素描と共に、徹底的に暴き出すことである。戦後農民運動の革命的戦闘的伝統を、あくまでも守り抜き、発展させるために、

代物に転化している。彼らの「社農一号」の綱領は「将来の農業政策」は、まさにその生命力を、あくまで反革命行為を担う時にのみ発揮するものである。

同志諸君！　鉄塔決戦攻防への大胆なる決起を切り拓くべく、これら社会排外主義、右翼日和見主義の影響をはね、全前衛者人民をきっぱりと解き放て！そして、ヘ武装蜂起－プロレタリア独裁へ の大道の下に、戦後農民運動の革命的戦闘的伝統を、あくまで守り抜き、発展させるために、

三里塚現地闘争委員会（三里塚現地闘争委員会の略）　住み一

彼らは「三里塚廃港直お宣言」とは、日帝一国家権力には一指も触れない、社会の尻拭い運動という、おそるべき革命変形とは無縁の代物である。「自民党政府打倒の農村三里塚闘争もせいぜいこの程度のものであり、鉄塔決戦とは、そのための時間かせぎ役、暴露の材料に過ぎないものに他ならない。

こうした中にも、「侵略反革命戦争との対決」を唱え、「ベトナム完全勝利一周年」記念集会に参加するなど、一派は、数百個の三里塚闘争の旗立てに口をぬぐい、今更ながらに「三里塚闘争に学び」にゴキブリ的に群がった。日向一派の野望に組みするものである。戦後農民運動の最も厳しい素描と共に、徹底的に暴き出すことである。戦後農民運動の革命的戦闘的伝統を、あくまで守り抜き、発展させるために、

代物に転化している。彼らの「社農一号」の綱領は「将来の農業政策」は、まさにその生命力を、あくまで反革命行為を担う時にのみ発揮するものである。

同志諸君！　鉄塔決戦攻防への大胆なる決起を切り拓くべく、これら社会排外主義、右翼日和見主義の影響をはね、全前衛者人民をきっぱりと解き放て！そして、ヘ武装蜂起－プロレタリア独裁へ の大道の下に、戦後農民運動の革命的戦闘的伝統を、あくまで守り抜き、発展させるために、

三里塚現地闘争委員会（三里塚現地闘争委員会の略）　住み一

農民運動の中軸にこれを据え、日帝－国家権力を、壊滅せしめねばならない。そして、反帝戦線（全国委）は、我々三里塚現地現斗団と共に、断固としてこの斗争を担い抜くことを明らかにし、共に決起されんことを全国の同志に呼びかける。

全国の革命的労働者人民、農民諸君！

今こそ、反対同盟と固く結合し、この「革命と戦争の時代」を積極的に切り拓かんとする革命的隊伍を、日帝－公団に思い知らしめよ！「日帝の朝鮮侵略を革命戦争を内戦に転化せよ！」。日本プロの決して手離すことのできないこの革命的スローガンは明日のことではなく、今日の我々の実践的指針であり、我々はひるむことなく

運動の革命的戦斗宣言を、他ならぬ、この激しい鉄塔決戦攻防の中で斗い取れ！

すでに三里塚現地では、着々と準備が展開されている。日帝－公団の廃港攻撃をにらみつけ、敢然とそびえたつ鉄塔をあおぎつつ、反対同盟を中軸とした革命的労働者農民の戦列は、現斗本部のヤグラを組み直し、全国の十万鉄塔共有者に「内容証明郵送」を呼びかけ、10月3日には「仮処分申請粉砕！鉄塔決戦勝利！廃港阻止！三里塚現地総決起集会」を組織し、総力戦斗体制を築きあげんとしている。

革命的労働者人民の政治新聞

烽火

— NOROSHI —

共産同（全国委）を読もう

305号 — 発売中 150円

日米帝の朝鮮侵略反革命を内戦に転化せよ！

民主連合政府の補完物＝第四インター「労農政府」論

三里塚現斗国呼びかけ — 10・3現地斗争に総力をあげ結集せよ

18

天皇制と闘かう全ての人々の必読書

取扱中

- 75・7・17姫百合・白銀決死隊員糾弾状 200円
- ひめゆりの炎（創刊号） 500円
- 姫百合－白銀公判斗争勝利 関西「支持する会」パンフ 100円

大阪戦旗社

共産同党内一分派一党派斗争の勝利的地平を踏まえ、プロの武装蜂起を組織する中央集権非合法党建設の下、現斗再建斗争に勝利し、鉄塔決戦勝利。三里塚斗争勝利へ驀進せよ！

全国の全ての革命的プロレタリアート人民・農民の皆さん！ 同志・友人諸君！

66年7月4日、日帝国家権力が、アジア侵略反革命－他民族抑圧の野望をむき出しにした空港建設を閣議決定して以降、一貫して斗い続けられた非妥協・不屈の三里塚斗争は、今日10年を経過し、文字通り10年目の正念場をむかえている。日帝－国家権力は、0年来の「決着」をつけんとし、今秋か冬にもその反革命的攻撃を、三里塚の地に敢然とそびえた、飛行を阻止している岩山大鉄塔に対して打ち下さんとしているのである。

この攻撃は明らかに9・16機動隊センメツ戦に代表される反対同盟・青行・革命的左翼の血の斗いを通してかちとった日本農民運動の革命的飛躍の物質的基盤に対する真向からの恐怖をこめた圧殺攻撃であり、全国の農民・漁民・基地住民斗争を圧殺せんとする攻撃である。そしてこれは唯一、日本帝国主義が、自らの延命をかけた官僚的警察的独裁支配の強化をテコとした、侵略反革命－南朝鮮新植民地主義支配の完成化の攻撃である。

我々は、このことをしっかりと踏まえ、ギリギリと煮つまる鉄塔決戦に勇躍決起し、帝国主義の侵略反革命と総対決し、「武装蜂起－アロ独」を戦取する斗いを組織し抜か

19

ねばならない。

このような現実的展望と決意をもって、我々は、共産同全国委内分派党派三者の勝利的結着を踏まえ、反帝戦線全国委再建当面の本格的遂行に着手した。ちょうどこれをもって本格的に着手された現闘再建の当面は、これへの一貫した反対派、敵対を重ねるサークル主義、解党主義者の組織的除名・放逐を宣言し、開始された。

我々同盟党内一分派斗争は、60年代後半、戦後帝国主義支配体制たるヤルタ・ジュネーブ体制の最終的崩壊ー「戦争の時代」の煮つまりの中で、自国帝国主義打倒ー帝国主義の侵略反革命を内戦に転化させることを、日本マロの実践的任務に具体的にのぼせながらも60年秋期を保決戦の敗北の総括をめぐって開始されたものである。我々はこの時代を勝利的に切り拓く一切の陥没斗争指導の基軸を、ヘ武装蜂起ー革命党建設ト組織する中央集権非合法党建設ト定め、帝国主義ー社会帝国主義との全面戦争の烈火の中でこれを実現せんとしてきた。

そして、我々現闘内における論争をさらに、71年の、16に登りつめた農民の革命的民主々義斗争の最高峰たる三里塚斗争の次の発展段階を、この下に敢取し、日帝の農民支配、社会農政改良運動とさっぱりと解き放ち、これとの根底的対決を引いとっていくための指導路線をめぐって存在したのである。反対同盟との固い団結の下に、築きあげられた三里塚にもみるが全国委現斗の成果を、この勝利に結実させるなどとしてあったのである。

昨年3月以降の9ヶ月間に及ぶ現闘内論争の再組織の斗いは、70年夏以降の党内斗争の激化の中で、党の任務を含むウ運動、労働組合運動の援助、助力に切り縮め、現実の階級攻防から逃亡する加納ー北の抽き反革命集団を生み出し（高瀬はこの下に三里塚現地から脱走し、三里塚斗争から逃亡した）たことに対する自己批判を欠けに現闘内総括問題と、迫り来る鉄塔決戦の組織化に対する我々の組織的任務をめぐって煮つまったのである。このような中で、サークル主義者＝解党主義者＝Nは、我が党内ー分派ー党派斗

争から逃亡し、我々同盟再建の当面の勝利的前進に対し、「批判の自由」をふりかざしつつ、一貫して露骨な敵対をくりかえし、結集した組織崩壊に反対した。Nはその他の立場をおおいかくすためにのみ、現闘再建ー同盟再建を「個々の政治傾向の違う者同志」による「サークル建設」にすりかえ、強固な単一の結集した組織団結に反対し、あげくのはてに、現闘の任務を「農民の調査」「綱領作製のための研究」に陥し込めることを自らの政治的任務としたのである。

このようなNの立場は、迫り来る鉄塔決戦に対して我々党内一分派ー党派斗争の勝利的前進にとらえ返し、現闘再建の本格的着手の前に自らのサークル主義、解党主義としての姿を暴露され、もはや我々同盟の中に許容しえないものであることを自覚するや必至ちょうどをもって、全国委ー現闘再建に対する敵対分子としての政治的登場を宣言するに到り、解党主義、無党派綱領主義はここに外化するに至ったのである。この段階で我々は、共産同全国委中央委員会臨時指導部と現闘団の名をもって、サークル主義者、解党主義者＝Nの同盟全国委からの除名と、現闘からの追放、三里塚からの放逐を決定した。

我々は、このようなNをはじめ、現闘再建に対する、全国委再建をもってする組織的結着をめぐる斗争を対象化するとともに、自己解体の道を歩んだ小屋用救援の旧現闘員Mを我が全国委から生みおとし、迫り来る鉄塔決戦を迎え、三里塚現地闘争の圧倒的高揚をかちとり、反帝戦線全国委再建の当面の任務を貫徹し、全国委ー現闘再建の本格的着手をかちとり、共産同全国委中央委員会臨時指導部と現闘団の名をもって、サークル主義者、解党主義者＝Nの同盟全国委からの除名と、現闘からの追放、三里塚からの放逐を決定した。

我々は、このようなNをはじめ、現闘再建に対する、全国委再建をもってする組織的結着をめぐる斗争を対象化するとともに、自己解体の道を歩んだ小屋用救援の旧現闘員Mを我が全国委から生みおとし、迫り来る鉄塔決戦を迎え、三

里塚斗争の革命的発展をなしけた我々の組織的準備の急つまりの中で、このように外化させ、反対同盟への混乱のもちこみのみならず、権力、条件派からの防衛の任務の放棄すら、脱落分子どもに行なわせたことを痛苦に自己批判し、これと我々の斗争の地平を鮮明にし、断固たる現闘再建を前進させる決意を明らかにしなければならない。

我が現闘団は、N除名ー追放を成しきると共に、直ちに再建斗争の第一期の斗いを開始し①Nと我が同盟との関係は、三里塚斗争の革命的発展の阻害物たる右翼日和見主義を生み出したことへの斗争としてあり、我々は権力・反革命との緊張関係の中で・現闘の強化、反対同盟の強化の中で、その結着はつけること。②現闘は、権力、条件派との反対同盟の斗争の武器であり、団結の要であり、我々は斗う現闘団としてこの任務を果し、反対同盟との固い組織共斗関係を形成していくこと、この確認と実践化をもって、第一期は基本的に勝利した。

このオ一期の勝利の地平をふまえて、鉄塔決戦をにらみつつ第2期の斗いに突入した。

第2期の戦いは、明確に「テロの武装蜂起とテロ独を組織する中央集権非合法党建設」の下、日帝の開港攻撃と対決し、我が総力をかけて、鉄塔決戦勝利を斗いとり、戦後農民運動の革命的出発点を我が手にする斗争の組織化に他ならない。

我々の前進は、反対同盟との組織的共闘関係の強化と不可分であることが前提である。

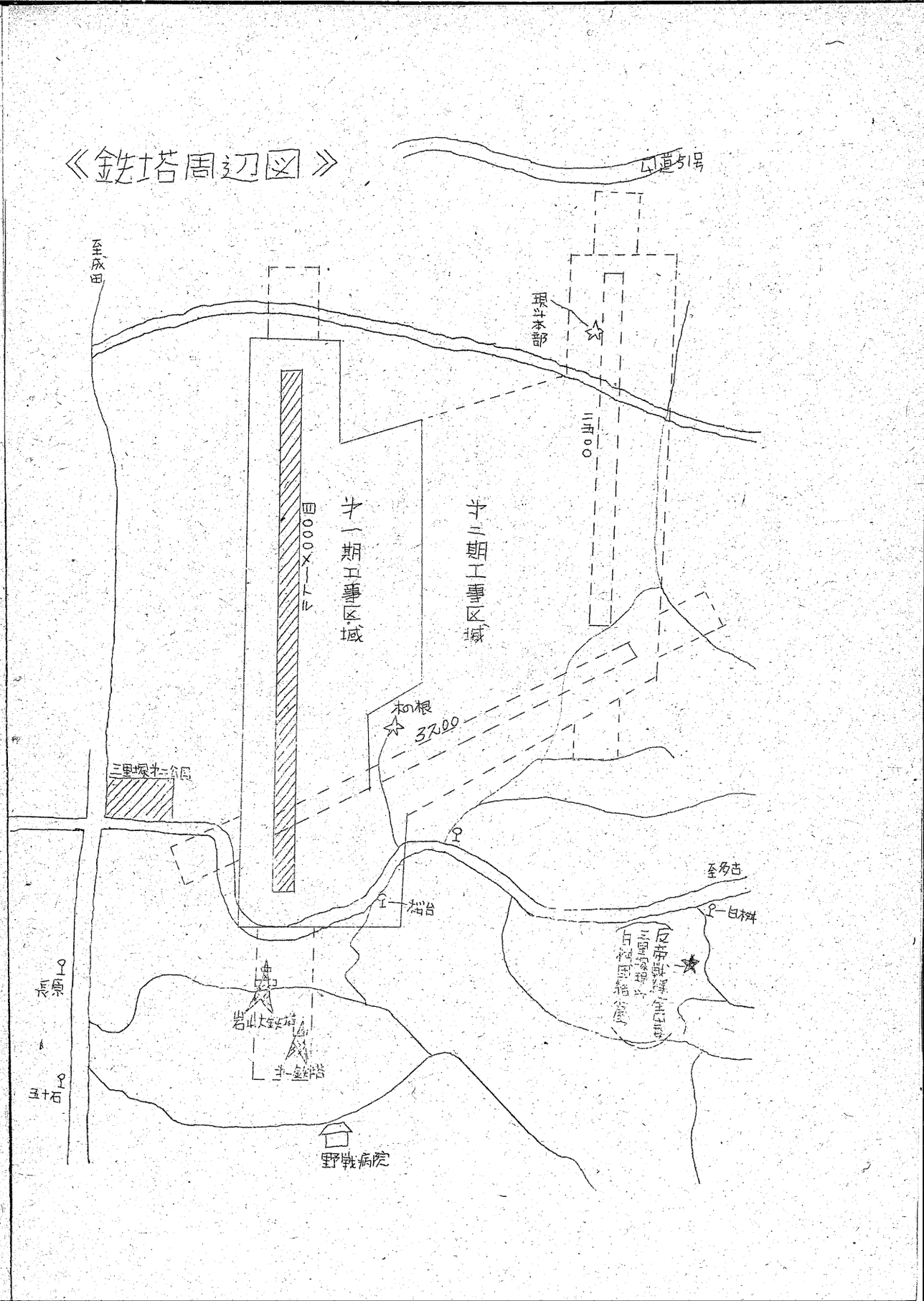
日帝国家権力ー空港公団は、鉄塔決戦へ向けた攻撃を強め、同時に敗北主義を育成し、三里塚斗争の一切を破壊しつくさんとしている。その現実は、2、26産土参道破壊道路建設阻止斗争における戒厳令下の大弾圧をはじめとしその裁判における「鉄塔前哨戦」たる反動的訴訟指揮や、現地における政治警察ー機動隊の日常的徘徊と白色テロル等としてかけられ、官僚的警察的独裁支配の強化を日々打ちおろしているのである。そして、これらの攻撃に内部から屈服し敗北主義をまきちらすものは、瀬利脱落派以降顕在化した一握りのブルジョアジーの同盟者のみならず、社共排外主義政権構想に屈服、追従する右翼日和見主義諸潮流の暗躍が存在するのである。4トロを筆頭とした右翼日和見主義が反対同盟の瀬利問題の間隙をぬって浸透し、社共排外主義政権構想への溶解に「発展」させんとする動きを完全に粉砕しきり、我々は現闘再建の一切の成果をもって革命的農民と手をたずさえ、三里塚斗争勝利の革命的水路を切り拓くべく最後まで斗い抜く決意である。

今こそ、三里塚10年の斗いが、戦後農民運動の革命的飛躍をかけた斗いとして存在していることを明らかにし、それ故にこそ革命的民主々義斗争の最高峰としてのこの斗いは一瞬もアイマイとすることなく、革命的政治斗争と結合させその不屈の隊伍をもって、朝鮮侵略反革命戦争に突破の道を求める日帝ー国家権力を震撼せしめねばならない。

我々は現闘再建の第2期の斗いを、反対同盟との固い結合をかちとり、組織的発展を軸とした斗いを組織しきり、必ずやこの任務をなしとげなければならない。

苛烈な党派斗争を勝利し、「戦争と革命の時代」を能動的に切り拓く「テロの武装蜂起を組織する中央集権非合法党建設」の下、三里塚斗争の革命的発展、鉄塔決戦勝利へ向けた現闘再建に勝利せよ！

我々は、以上の決意を合言葉とし、三里塚斗争勝利に向けた斗いにマイ進することを宣言するものである。



資料

成田市議会「交通アクセス対策」決議

昭和四十一年七月新東京国際港及閣議により成田市に決定。以来、当議会は事の重大性から深い関心をもち、進言すべき事についてはその都度具申してきたところである。

特に、交通アクセスの解決策については昨秋より再三にわたり要望陳情を重ねてきたが、何らの具体策も出ていない実情であり、誠に遺憾とするところである。

もし、仮りに当局が何ら誠意を示すことなく開港を意図するならば、当議会は断じてこれを認めることは出来ない。

よって当局は次の事項につき速やかに結論を出し鋭意対処すべきである。

(1) 国鉄成田駅から国道五十一号線へ通ずる新道路（高架又は地下道を含む。）を建設するとともに、国道五十一号線を拡幅し、国道二九五号線へ出来る限り入れを可能にすること。

(2) 国鉄在来線を早急に空港まで延長すること。

(3) (2)の完成までに長期間を要する場合は、その間必要に応じ在来線延長途上の土重周辺に暫定的として仮設駅を建設すること。

右決議する。

昭和五十一年六月二十三日。

25

日帝ハ公団の開港策動の破産

三里塚・芝山連合空港反対同盟資料

開港は絶対にできない('75年末～'76年初頭)

＝その一＝

成田市民のみなさん△空港建設に対して、何らかの形で関係しているみなさん△

みなさんは今三里塚空港が本当に開港されると思っていますか。"政府や公団はマスコミを使って"空港は既に95%ができあがり残りの5%を作れば完全に完成され、すぐにでも飛行機が飛び出す"かの様に言っています。

しかし、私達は政府や公団がいっている様にそう簡単には開港はできないと思っています。

それは、残りが5%とは言ってもその5%の中には今までにできたといわれる95%よりもずっと多くのそして大きな問題をかかえて、たいへんな大仕事を残しているからです。

完成したといっている四千メートルの滑走路にしても誘導路(アプローチ・エリア)が事業認定されておらず、この土地の買収には第1次・第2次代行執行の様な強制収用をもってでも行なうということは絶対にできません。

また、仮に飛行機が飛べたとしても、飛行場に着いた乗客を東京まで運ぶ乗り物といえば、現在使われている京成線と、毎日十キロメートルにもわたって停滞を起している京葉道路を使用するしかなく、成田新幹線の建設

にしてもとうていできる見通しはなく、交通の過密をひき起し、東京まで何時間かかるかわかりません。

ジェット燃料の輸送にしても、本格パイプラインのメドがつかない今、暫定的に鹿島から貨車で運ぶと言っていますが、はたして貨車による輸送がどこまで可能な事でしょうか。

もしも、ジェット燃料を満積した貨車が脱線事故などでも起こしたら大変なことになり、それだけで空港は成り立たなくなります。

騒音問題はというと、これも完全な解決はできないだろうし、無理にやろうとすれば一兆円以上もかかるだろうと言われています。

また、飛行機が飛ぶ空域については、防衛庁との話し合いがつかず、百里基地と羽田と三里塚の飛行機が同じ空域の中にはいり、今のままでは非常に危険で、飛行機事故を起こす原因となります。

その様な訳で、残された5%の問題を解決する為にはお金の問題で言えば、騒音問題でかかる外に、更に一兆円以上もの費用がかかると言われています。(現在まで空港建設に使った金が七千億円)

更にもっと大変なことは、私達反対同盟がガンバッテいて、第二期工事区域の我々の土地も三、四年すれば事業認定が切れて、これも強制収用できなくなってしまいます。

従って、政府や公団の言っている"すぐにでも開港できる"などと言っているのは真赤なうそで、三里塚に空港は、絶対にできません。

一九七五年一二月一八日

国鉄再建計画

ベテランたちの挑戦

＝1984＝

国鉄再建計画は、なかなか難しいものになっている。

第一に、この計画の実施には、大きく分けて二つの問題がある。

一つは、財源の問題である。

国鉄は、現在、約二十兆円もの借金を抱えている。

この借金の利子だけでも、毎年、莫大な金額になる。

二つ目は、人員の問題である。

国鉄には、約四十万人もの職員がいる。

この人たちの雇用をどうするかが、大きな問題になっている。

政府は、この問題を解決するために、様々な案を出している。

しかし、どの案も、一長一短があり、決め手に欠けている。

このままでは、国鉄の再建は、ますます難しくなるばかりだ。

十年ぶりのストライキ

＝1975＝

国鉄労働組合は、昭和五十年十一月二十六日から、全国一斉にストライキに入った。

ストライキは、賃上げや労働条件の改善を求めて行われたものである。

今回のストライキは、国鉄の歴史の中でも、特に大規模なものとなった。

全国の主要な駅や操車場で、列車の運行が完全にストップした。

ストライキの期間は、当初は二日間の予定であったが、結局、五日間にわたって続いた。

この間、通勤・通学客や、貨物輸送に大きな影響が出た。

特に、生鮮食品などの輸送が滞ったことは、国民生活にも大きな打撃を与えた。

ストライキの背景には、賃金問題のほかに、労働時間の短縮や、人員整理の問題などがあった。

国鉄当局は、組合側の要求を一部認めたものの、全面的な解決には至らなかった。

ストライキが終了した後も、労使の対立は尾を引き、職場の雰囲気は悪化したままであった。

この事件は、国鉄の労使関係に、大きな傷跡を残すことになった。

国鉄再建監理委員会の発足

＝1981＝

昭和五十年代に入ると、国鉄の赤字は、ますます膨らんでいった。

昭和五十五年度の赤字は、一兆円を超えると予想されていた。

この巨額の赤字を、どうやって解消するかが、大きな課題となった。

そこで、政府は、昭和五十六年七月、第二臨時行政調査会（第二臨調）の下に、国鉄再建監理委員会を設置した。

委員会は、十人の委員で構成され、会長には、元経団連会長の土光敏夫氏が就任した。

委員会は、国鉄の経営の実態を調査し、再建のための具体的な方策を検討することになった。

委員会は、昭和五十六年十二月、最終答申を提出した。

答申の内容は、国鉄の経営形態を、現在の公社から、民間企業に近い形態に変えるというものであった。

また、全国を十の地域に分割し、それぞれを独立した会社とするという案も含まれていた。

この答申は、国鉄の歴史を大きく変えるものとなった。

十兆円の借金

＝1985＝

国鉄の借金は、昭和五十年代の後半から、急激に増え始めた。

昭和五十五年度には、一兆円を超えると予想されていた。

この巨額の赤字を、どうやって解消するかが、大きな課題となった。

そこで、政府は、昭和五十六年七月、第二臨時行政調査会（第二臨調）の下に、国鉄再建監理委員会を設置した。

委員会は、十人の委員で構成され、会長には、元経団連会長の土光敏夫氏が就任した。

委員会は、国鉄の経営の実態を調査し、再建のための具体的な方策を検討することになった。

委員会は、昭和五十六年十二月、最終答申を提出した。

答申の内容は、国鉄の経営形態を、現在の公社から、民間企業に近い形態に変えるというものであった。

また、全国を十の地域に分割し、それぞれを独立した会社とするという案も含まれていた。

この答申は、国鉄の歴史を大きく変えるものとなった。

「公団は、危険はないといっているが、それならばなぜ迷惑料など払うのだ。危険だからこそ払うのだ」。又、西山英三郎さんは「一九六四年の新潟地震を見ればわかる様に専門家の学者達が、絶対大丈夫と太鼓判を押した家屋が倒れ、石油タンクが爆発して三日三晩も燃え続ける。というのが、新しい安全装置や近代消防装置を誇った保安体制の現実なのです。公団の言う安全論は、この問題を解決するだけの安全性を証明するものには程遠く、計画は絶対に撤回すべきだ」と言っています。

ここで本格パイプラインの建設状況を説明しますと次の通りです。

工区	総延長(m)	既完成(m)
塙内工区	二二四二	二二四二
資材道路工区	二三八八	二三七一
成田工区	一三五一	一二八七
酒々井富里工区	一〇三一七	八〇六五
四街道佐倉工区	一二五七一	六一一八
千葉市工区	三九〇三	二五五二
水道道路工区	四三七九	六五七
護岸敷埋立地工区	七二五三	六九四六
合計	四四四〇四	三〇二四八

30

右の表を見ればわかるように、全長約四十四キロメートルのうち、出来上がっているのは、約三十キロメートルです。従って残りは約十四キロメートルですが、その土地というのは、未買収地であり、まず買収から始めなければなりません。この土地は、一万四千平方メートル、百十一筆であり、全て東関道の沿線で、今まで危険がなくても売らなかった人達なのです。その上、こんどは、燃料輸送のパイプラインを埋めるとあっては、地価は下がるし、絶対に売ることはないでしょう。又、水道道路工区に至っては、原告住民の提訴から一ヶ月後の八月十八日、空港建設の"最高責任者"である、木村運輸相が千葉市役所において、荒木市長と会談し、「パイプラインの千葉市内通過ルートについては、一部の既設の水道道路ルートの埋没済みのパイプも、公団に撤去させて、御破算にする」という「白紙撤回」の約束をしたのです。その様な訳で、本格パイプラインの完成まで、三年間だけ茨城から貨車で運ぶと、言っていますが、三年や五年では、絶対に出来るはずがありません。今や成田空港ばかりではなく、北海道の伊達火力や、富山の新港火力発電所のパイプライン等も、沿線住民の反対運動が広がっており、安全基準は高まり、建設可能な所は日本にほんどなく既設のものも、抜かなくてはならない状態です。

31

823 ジェット燃料貨車輸送阻止 三里塚空港粉砕 総決起集会

「集会宣言」

本集会におあつまりの皆さん。私たちはいま、この農島で、三里塚農民と農島住民とが共同で集会をもつことができました。

金と力に威を借りた「強者」たちがその気まぐれと無節操さで決めた空港を、三里塚の農民は、廃港に追いやろうとしています。その問いは、自分たちの生活を足げにする「強者」たちにしっぺ返しを食わせ、自分たちの生活を取りもどす問いです。

鹿島では札束で農民の頬をぶちながら農民の生活をぶち壊すことで鹿島コンビナートが建設されてきました。その傷がなお深まるなかで、住民を踏み台にし、仲間うちで三里塚空港の利害のおこぼれにあずかろうとする連中が、ふたたび動きだしています。先のジェット燃料貨車輸送についての空港公団と三町教行部との取り決めは、住民の生活の被害を前提にしており、そして多くの住民の苦しみによって「勇者」ぶる甘い汁を吸うものにほかなりません。私たちは、今回の取り決めの仲介役となった芝城県当局とそして三町教行部のとった行動とを、反住民的なものとして徹底的に糾弾していかねばなりません。

しかしわれらを指さして非難するだけでは、私たちの生活がもどってこないことは明らかです。同時に自明なことは、空港もジェット燃料も私たちには無縁で無用のものだということです。住民の力によって、空港たらまだ一機も飛行機も飛びたってはいません。ジェット燃料輸送だけではなく、他の問題にもひきずられ、まだなお開港のメドは立っていません。開港のメドが立たず、廃港にすら追いこまれている空港に、ジェット燃料を輸送する理由はヒトカケラも見あたらないのです。これら無用のものを投げすて、そして私たちの生活を取りかえし回復させる道は、自分のからだと知恵とを全分にはたらかしてのみです。

最後に、ジェット燃料輸送阻止と空港粉砕とを結びつけ、からだと知恵とを全分に使い、闘い抜けることを宣言する。

一九七六年八月二十一日

鹿島ジェット燃料輸送に反対する会

三里塚芝山連合空港反対同盟

4.28全国総決起闘争の築いた管制高地を踏み固め

5・15 首都総結集 中央大闘争の最前線に躍り出よ！

台頭する社会排外主義＝日共、革マルとの対峙深め、危機に立つ日帝の侵略反革命―他民族抑圧の急展開を5・15―6月沖縄、入管、狭山、三里塚総力戦で打ち砕け！

全国のすべての先進的労働者、学生、市民の皆さん。

5・15沖縄「返還」一周年に際して、われわれは、5・15首都総結集・中央総決起闘争に全国から総決起せんことを心から訴える。

5・15闘争を眼前に控えた今、先進的労働者、学生、市民に課せられた任務はますます鮮明になってきている。それは、まず第一に、ベトナム「停戦協定」をもってベトナム解放闘争が終了したかのごとき幻想をふりまく帝国主義の攻撃を粉砕し、結果としてそれに同調する「反スタ」派の「第二のジュネーブ」論を打ち砕き、米・日帝国主義の一切の侵略反革命政策と対決し、ベトナム民族解放闘争との更なる団結・支援を強化することである。

そして、第二に、四つの課題（安保―沖縄闘争、入管法・入管体制粉砕闘争、狭山差別裁判糾弾闘争、三里塚闘争）として課せられている、敵権力の攻撃に対する徹底した反撃の組織化でなければならない。

第三に、これらの闘いの組織化の過程で、反革命的な、あるいは反動的な諸党派の影響から、春闘に決起している労働者階級をはじめ広範なプロレタリア大衆を解き放ち、真の国際主義でプロレタリアートを武装し打ち固めねばならない。今日、文字通りの排外主義＝反革命としてあらわれている社会帝国主義者、社会民主主義者、革マル派との党派闘争を徹底的に強化して彼らの影響力を労働者階級の内部から取り除くこと、同時に、これらに対して急進主義的にしか対応し切れない革共同中核派や、排外主義との闘争を党建設から離れたサンディカリズム的次元においてしか提起し得ない諸サークルの解体・再編は、決定的に重要性を増している。

われわれは、5・15―6月闘争の任務をベトナムに対する米・日帝国主義の侵略反革命との対決の強化、ベトナム民族解放闘争との結合・支援の更なる強化を前提として、第一に、安保―沖縄闘争として設定せねばならない。

5・15体制は、第一に、ニクソンドクトリンに基づく沖縄―グアムを結ぶ米海・空・海兵隊の強化、ベトナム「停戦」後の更なる沖縄―グアム基地機能の強化、高度化であり、日本帝国主義は、それと結合を図りつつ、自衛隊大量派遣によって日帝の必須の運命となっている民族解放闘争との対決―侵略反革命と東南アジア諸国に対する新植民地主義的支配の前線基地としての強化をはかろうとしており、沖縄の軍事基地は、米軍の後退―日帝の肩代わりではなく米日両帝国主義によって相剰的に強化され、日米共同による〝最前線基地〟の共同管理体制は一段と強化されつつある。

5・15体制の第二の内容は、「一体化政策」の名の下に行なわれている日帝のすさまじい「略奪」の急展開である。75年海洋博にむけた三千億円にのぼる資金の投入は屋良の「沖縄振興開発計画」と一体となって本土資本の進出、土地買占め、関連事業への労働力の吸引等による農業の荒廃や公害発生による漁業の切り捨てが急速に進んでいる。われわれは、五、六月闘争において、本土―沖縄を結ぶプロレタリア人民の全戦線において日帝の侵略反革命戦争遂行体制の環をなす、日帝の沖縄支配―「改造」に対決せねばならない。

（ウラへつづく）

沖縄、入管、狭山、三里塚総力戦勝利

5・15中央総決起闘争

とき　5月15日午後五時

ところ　東京・礫川（れきせん）公園

―地下鉄丸の内線「後楽園」下車北一分―

主催　実行委員会

反帝戦線（全国委員会）

連絡先　東京戦旗社（03）633-0339　大阪戦旗社（06）371-3706

（オモテよりつづく）

われわれは、5・15―6月闘争における第二の任務を、入管法・入管体制粉砕の闘いとして提起せねばならない。

われわれは、入管法（「出入国法」）今国会上程の攻撃を、在日朝鮮人六〇万をはじめとする在日アジア人民六十七万の存在そのものに対する攻撃として把えねばならない。在日アジア人民、とりわけ朝鮮人民、中国人民の「在日」たることの重みは、その「在日」の起源が、日本帝国主義の「焼き尽し、殺し尽し、奪い尽す」侵略の結果、強制連行―強制労働・「渡航」の結果であることにとどまらない。彼らは、「在日」たる存在そのものが、帝国主義への告発であり、同時にまた日本階級闘争―日本共産主義運動の屈服、加担のいわば「生き証人」なのである。帝国主義者どもが、在日朝中人民をはじめとする在日アジア人民の存在そのものに恐怖するゆえんである。入管法の四たびにわたる上程の「執念」もここに起因するのだ。

排外主義と国際主義の分水嶺――それは、入管法に対する態度と行動においてとりわけくっきりと描き出され、全プロレタリア・人民を容赦なくこの分水嶺の右と左に分け尽くさずにはおかないであろう。この試練に真向うから応えぬくこと以外に、われわれの進むべき道はない。

第三の課題は、狭山差別裁判糾弾闘争である。われわれがくり返し確認せねばならないことは、

第一に、この裁判が当初から、社会的に存在する部落差別を利用して石川一雄氏を犯人としてデッチ上げ、そのことによって権力の威信の保持をはかるとともに更なる差別キャンペーンを展開することを目的としたものであったこと、

第二に、六〇年代後半以降の日帝の侵略反革命体制確立、官僚的警察的独裁の確立過程において、この裁判にかける権力の意図は更に増大し、文字通り支配階級の延命のための徹底した差別分断と抑圧支配の環にまでおし上げられているのである。

それ故、われわれの闘いは、まず、石川氏を犯人にデッチ上げるために権力が利用し、更にキャンペーンによって強化した部落差別に対して無自覚であったわれわれ自身の思想的政治的根拠をえぐり出し、ついでこの闘争を70年代の帰すうを決する政治闘争として全戦線の総力を挙げた闘争として組織しなければならない。先に述べた権力の意図からして井波に代わる寺尾新体制は、井波のそれよりははるかに巧妙で反動的な強化された体制としてわれわれに対決を迫ってくるであろう。寺尾体制との最初の対決を勝利的にかちとることを通して全人民的政治闘争としての勝利の道を切り拓かねばならない。

更に、われわれは、これまで述べてきた5・15―6月闘争の任務を、徹底的に、今春闘を中心に決起している労働者階級の中に持ち込み政治的にこれを打ち鍛えなければならない。これらの作業は、今日、労働戦線内部における組織的には排外主義的「戦線統一論」、経済的には「福祉政策論」としてあらわれる帝国主義的労働運動との対決と一体のものとして闘われねばならない。

同時に、帝国主義的労働運動との対決は、単に彼らのイデオロギー批判、今日の階級闘争の発展段階における彼らの客観的役割（支配者とプロレタリアートの政治的対決点からプロレタリアートの目をそらし、彼らを資本家階級に売り渡し、のみならず、帝国主義者の侵略反革命―他民族抑圧に直接に加担しているという）を暴露するのみならず、56年以降の技術革新―第一次合理化の過程以降の職場機械の転換―企業内支配構造の転換の過程で、或いは後進国への資本進出―企業進出の過程で、はたまた日本帝国主義の特有の強蓄積機構―二重構造の中で、彼らが労働者階級内部のどの層に依拠しつつ帝国主義への屈服を準備してきたかも併せて明らかにし、彼らの活動の根拠のすべてを奪い去る闘いを進めねばならない。

そして、それを党建設と固く結びついたものとして展開しなければならない。第二次ブンド系諸派の政治的解体が、無政府主義的・サンディカリズム的傾向を通してあらわれている今日、第二次ブンド系の解体、統合を焦眉の課題として要求されている先進的プロレタリアート・人民にとって、すべての政治闘争、イデオロギー闘争を党建設と結びつけて提出することは何にもまして重要である。

台頭する社会排外主義＝日共、革マルとの対峙を深め、危機に立つ日帝の侵略反革命―他民族抑圧の急展開を、5・15―6月沖縄、入管、狭山、三里塚総力戦で打ち砕け！

ベトナム「停戦協定」＝勝利への橋頭堡を踏み固め、日米帝の侵略反革命の新展開を挫折せしめよ！　安保（―沖縄「返還」協定）粉砕―日本帝国主義打倒、臨時革命政府樹立！

「組織」破防法体制下、社会排外主義を粉砕し、革命的左翼の再編担う党建設を！　闘う労働者、学生は反帝戦線（全国委）に結集せよ！

4・28全国総決起闘争の築いた管制高地を踏み固め、5・15首都総結集・中央総決起闘争の最前線に躍り出よ！

4・28全国総決起闘争の築いた管制高地を踏み固め
5・15首都総結集・中央大闘争の最前線に躍り出よ！

反帝戦線（全国委員会）

連絡先　東京戦旗社（03）633-0339　大阪戦旗社（06）371-3706

決して農民魂は死なず，みたびわれらは決戦に立つ

三里塚から第二次強制収用阻止のたたかいに
全国民の総決起を訴える

三里塚・秋の決戦を目前にひかえて、われら農民魂のゆるぎないこと、さらに、本決戦にあたっての決意と全国の同志諸君へ三里塚からの火急の要請をここに明らかにしたいと思います。

地下壕・農民放送塔の闘魂はゆるがず、いままた権力と対決する

七月、駒井野一・二番地下壕・農民放送塔に対する公団・機動隊による撤去作業は、六年間の三里塚における数多くの国家的犯罪の中でも極めて悪質なものでありました。地下壕に対しては、機動隊二千名の包囲の中で、壕の破壊が容赦なく行なわれます。壕内への食糧・水の輸送さえ、公団は拒絶しています。第一次収用の撤去作業とはことなり、地下壕の真上ではブルドーザーとモーターヌクレーターがうなりをあげ、側面からはユンボが、攻撃をかけます。このため壕内では震動が激しく、さらに、各所において土がくずれはじめていました。しかし、壕内十六名の同志は、この非道な公団の仕打ちに対しても闘いをやめることはありません。壕内にいく度となく突撃してくる機動隊や公団の作業員に対して竹槍で追いかえし、プロパン・ボンベの火炎放射で応戦しています。この壕内の反撃にたまりかねた公団は、ついに壕の入口からユンボの爪の背をつかって力いっぱい土塊を打ちつけ一時間も二時間も、しかも数回にわたって壕の入口を封閉したのです。当然酸素は欠乏して同志は次々と昏倒して行きました。

一方、地上での戦闘も極めて果敢に闘いぬかれました。機動隊の包囲を突破し、わが同志とともに地下壕を死守して権力のこの暴挙を阻止せんがためです。

地下部隊の数次にわたる攻撃と地下壕内の抗戦のため公団・今弁総裁はついに作業中止の決断に追いこまれました。この時われわれは、勝利したのです。翌日、公団の卑怯な手口で壕は破壊されました。しかし、なんとしてもわれわれの力で機動隊の包囲網を突破して、地下壕を守り、闘う農民との合流が成功するならば、われわれの完全勝利はあり得るのだという道理を七月の闘いは明らかにしています。

公団・機動隊、九月十六日に駒井野城・大木よねさんの住居・天浪団結小屋・木の根青行隊団結小屋など撤去開始をきめる

強制収用の前行東・友納武人は九月一日、三里塚・芝山の農民に第二次収用決行の最告書を発送し、十日までに農地・宅地・住居をあけわたさない場合は、破壊もしくは、立ちのきを強制する由、われわれに通告してきました。その上、破壊作業の日程・警備方針を新聞紙上に発表して、十六日から作業に突入することを明らかにしています。

われわれは三十三日間闘いぬいた第一次の収用、そして、七月、六日間の地下壕・農民放送塔死守の闘いを経て、いま、みたびの決戦に立とうと、固く決意いたします。

われわれは日本農民の名においてこの権力の横暴と非道を決して許すわけにはいきません。時の権力者の面子のみを守るため世界にも希有な内陸空港をあらゆる暴挙と策謀によって強行せんとするこの大悪事を、われわれはひとりの農民としても、断固として拒絶いたします。

駒井野団結小屋、大木よねさんの住居や田畑、天浪・木の根の各団結小屋こそ、三里塚・芝山農民の生活の拠点であり、この六年間の闘いの執念城でありました。

今次収用の大決戦こそは周辺住民・県下ならびに近隣各県・全国民のすべての諸兄とともに、われわれは総力で臨戦する所存です。

くそ袋と刀で戦う

大木よね（六五才）

今度はおらが地所と家がかかるので、おらは一生けんめいがんばります。公団や政府の犬らがきたら、おらは墓所とともにブルドーザーの下になってでも、くそ袋と稔さん（よねさんの亡夫）が遺していった刀で戦うだ。

この前、北富士の人たちはたった二十人でたいまつとガソリンぶっかけてたたかっただから、ここで、三里塚反対同盟ががんばらねえってことはない。ここでがんばらにゃ、飛行機とんじゃってしまうだから。おら、七つのとき子守り出されて、何やるったってひとりでやるにはむが夢中だった。おもしろいこと、ほがらかに暮したってのなかったね。だから闘争が一番たのしかっただ。もう、おらの身はおらの身のようであっておらの身でねえだから、おら反対同盟さ、身あずけてあるだから。六年間も同盟や支援の人たちと反対闘争やってきただから、だれが何といっても、こぎつけるまでがんばるだ。

機動隊の包囲をやぶり農民殺しをたたきだせ！

われら、三里塚・芝山連合空港反対同盟は、すでに地下壕を掘り砦を築いて戦陣をはりました。九月十五日には戦闘開始です。同志諸兄のみなさん、いかに機動隊の壁があつくとも、どのように道が封鎖されようともあらゆる術と知恵をかたむけて、われらの闘いに呼応し、合流して下さるよう、強く訴えます。そして、数日間の戦闘（野戦）に耐えうるよう御配慮をお願い致します。

権力者の無暴が荒野と化したこの三里塚一帯から全人民の血と力をもって農民殺しをたたき出し、無能・非道の権力者の息の根を立派に断ち切ってみせようではありませんか。

九月七日

三里塚・芝山連合空港反対同盟
成田市天神峰四二
TEL0476(22)8253

三里塚鉄塔江佐藤勝利
1971年9月25日発行
編集・発行責任者・青木 健
連絡先・大阪戦線社
06・371・3706
三里塚現地出版
04797・8・0020

ZOOM